

慶長5年8月22日の米野の戦い、同月23日の瑞龍寺山砦攻めについての一柳家の首帳に関する考察

白 峰 旬

【要 旨】

慶長5年（1600）8月23日、福島正則、池田輝政などの徳川家康方諸将の攻撃により岐阜城（城主・織田秀信）は落城した。その前哨戦である米野の戦い（8月22日）と、岐阜城の出城である瑞龍寺山砦攻め（8月23日）では、家康方部将である一柳直盛（尾張国黒田城主）が活躍した。『一柳家記』（著者は一柳図書、寛永18年〔1641〕5月成立）には、米野の戦いと瑞龍寺山砦攻めに関する首帳が収載されている。また、『一柳家記』には米野の戦いの詳しい戦闘状況に関する記載があるので、本稿では、『一柳家記』における該当箇所の記載をもとに考察する。

【キーワード】

一柳直盛、池田輝政、米野の戦い、瑞龍寺山砦攻め、首帳

はじめに

慶長5年（1600）8月23日、福島正則、池田輝政などの徳川家康方諸将は岐阜城（城主は毛利輝元・石田三成方の織田秀信）を攻撃して落城させた。その前哨戦である米野の戦い（8月22日）と、岐阜城の出城である瑞龍寺山砦攻め（8月23日）の首帳が『一柳家記』⁽¹⁾に収載されている。

この『一柳家記』には上記の2つの戦いについての具体的な記載があるので、本稿では『一柳家記』における該当箇所の記載を筆者（白峰）が現代語役をしたうえで、その内容を検討したい。

なお、米野の戦い前後から岐阜城攻めに至る経過について、通説的理解をまとめると以下のようになる⁽²⁾。

- (1) 8月22日、池田輝政は堀尾忠氏、山内一豊などの諸将を率いて清須城を出陣して岐阜城攻めのため、木曾川上流の河田（木曾川の渡河地点）に着いた。
- (2) 敵の織田秀信は、8月22日、岐阜城を出陣して木造具康、百々綱家らの先陣は、木曾川北岸の米野に布陣した。織田秀信は、その後方、岐阜城により近い境川の北岸の川手に布陣して本陣を置いた。
- (3) 米野の戦いでは、織田秀信方が敗北して、木造具康と百々綱家^{しんがり}が殿として境川の北岸まで後退して、さらに織田勢は岐阜城へ退却した。
- (4) 8月22日、福島正則は田中吉政、加藤嘉明などの諸将を率いて清須城を出陣して、岐阜城攻めのため、木曾川下流の尾越（木曾川の渡河地点）に着いたが、敵が待ち構えていたため、さらに下流へ移動して渡河した。そして敵の加賀野井城、竹ヶ鼻城を落として、岐阜城下へ向かった。
- (5) 織田秀信は自ら岐阜城の本丸に入り、木造具康を七曲口、百々綱家を百曲口に置き、出城

の稲葉山砦・権現山砦・瑞龍寺山砦などは石田三成から派遣された諸将に守らせた。

(6) 8月23日の岐阜城攻めは、家康方の浅野幸長・一柳直盛が瑞龍寺山砦を攻撃したことにより始まり、さらに稲葉山砦・権現山砦を攻撃して、岐阜城の出城を落とした。

(7) その後、福島勢は、岐阜城の七曲口（大手口）・百曲口（搦手口）から攻め、池田勢は水の手口から攻めた。そして、織田秀信は降伏した。

以上の経過を前提として、本稿での考察をおこないたい。

1. 『一柳家記』の記載

まず、『一柳家記』の該当箇所を引用者（白峰）が現代語訳したものを以下に提示する。なお、以下の記載において、①～③、a～mの各下線、及び、各【 】は、引用者（白峰）が現代語訳をした際に補足したものである。

【木曾川渡河作戦…8月22日】

同（慶長5年）8月21日、一柳直盛は清須へ行き、福島正則、井伊直政、池田輝政、本多忠勝、有馬豊氏、山内一豊、そのほか諸大名衆が集まり、川（木曾川）越えの評定があった。①一柳直盛は、その日の亥の刻（夜10時頃）にすぐに極楽寺の木曾川の河田（現・岐阜県各務原市川島河田町）の堤へ行き、その夜、このところに陣取りをした。

②同（8月）22日の朝、堤の下において大名衆へ弁当の饗応があった。この時、いずれも大名衆の小姓共が配膳をした。（一柳直盛の？）取り分は、堀尾忠氏の小姓が見事に鎧上巻（意味不明）とのことであった。一柳直盛の内の（家臣の）喜多川与次右衛門も四十（十四カ）歳にて供をして⁽³⁾、この時、配膳をした、とのことである。

③同（8月）22日の朝、山内一豊が言うには「川（木曾川）越えの次第は、池田輝政が一番に（川を）越えて、川の上か下に（備の）人数（軍勢）を立てて、その次に、堀尾忠氏（ママ）の人数（軍勢）が（川を越えて）川の上か下に備（を立てて、このように池田輝政と堀尾忠氏の）両備を立てて、そのあとに一柳直盛が（木曾川を）越すように」と言われた。

④その時、一柳直盛が言うには「このところは僅かに（自分の）居城（＝尾張国黒田城）より1、2里（＝約3.9～7.8km）の間」と言い、「⑤そのうえ、（自分の）領知の川を、いかに池田輝政が家康の聳であって、今日の先陣を命じられても、（自分＝一柳直盛）よりも先に行かせて、自分（一柳直盛）が後陣に行くことはまかりならない」と怒って、池田輝政の側へ寄って、（池田輝政を）討ち果たすように見えた。⑥（そのため）池田輝政が言うには「自分は大軍にて、そのうえ（家康から）先陣を命じられているので、是非一番に行くべきである」と言われた。この問答が数刻に及んだ。⑦その時、一柳直盛の家人の一柳九郎兵衛、石川忠右衛門、後藤六兵衛、藤野久左衛門などという物慣れた者共が、早くも備を張り出して、川（木曾川）へ人数（軍勢）を入れるような様子に見えた。

⑧その時、山内一豊が言うには「そうであるならば、池田輝政の名代として家老の伊木清兵衛の人数（軍勢）を少数にてまず川（木曾川）を越させ、その次に一柳直盛が川（木曾川）を越し、そのあとに池田輝政が（川を）越すのがよい」と言われた。

⑨その時、（山内一豊のこの提案に）互いに同心して、一柳直盛の瀬踏み（＝川の瀬の深さを、実際に足を踏み入れて測ること⁽⁴⁾）（役）の大野才兵衛（この郷の士である）が荷鞍馬に乗り、川（木曾川）を越えて、⑩（一柳直盛の）そのほかの手勢が続いて、一瀬の川を渡り、中洲へ乗り上げた。これによって、この手の諸大将は我劣らずと馬を（川に）入れ、中洲の河原まで（乗り）上げ鉄

炮の競り合いを始めた。ここに9尺(=約2.7m)ばかりの■■■の家があった。その上へ池田輝政、山内一豊がのぼって、敵の人数を見た。(その時)有馬豊氏と一柳直盛は(その家の)軒下^(マ)にいた。⑪山内一豊が言うには「敵の人数は4,500ばかりと見える」と言われた。その時、一柳直盛は「(敵の人数は)3500ばかりもいるだろうか」と言った。

⑫池田輝政は(中洲から渡河して)早くも一戦を始めるような様子に見えたので、⑬一柳直盛が言うには「自分は(中洲から)少し川下を越すべきである」と(言^マって)、足軽を上人数(多人数カ)引き連れて、2町半程(=約272.5m)下(=下流)へまわり、歩^カ行の士である福地久五郎、矢木茂右衛門に瀬踏みするように、と言ったところ、この2人はそのまま(川へ)飛び入り、浮きつ、沈みつしばらく漂っていたところ、一柳直盛は貝(=ほらがい)を鳴らして下知をして「川は浅いぞ、越す(べき)や、者共」と言^マって、⑭(一柳直盛の)800ばかりの人数(軍勢)を一手に備(として編成し)、その日の午の刻(=真昼の12時頃)に(中洲から)木曾川の河田の渡しを真っ先に馳せ渡り(米野へ着いたので)、鎧先を揃えて、大敵(=織田秀信方の軍勢)の中へ乗り込んだ。

【米野の戦い…8月22日の真昼の12時頃以降】

a (一柳直盛の家臣の)大塚権大夫は一番に馳せ向かい(敵の)飯沼勘平(=飯沼長資)と鎧を合わせ、(大塚)権大夫は大身の鎧を持って、堤の上から突き下した。(敵の飯沼)勘平は素鎧⁽⁵⁾を持って下から突き出した。鎧にて(大塚)権大夫は草摺⁽⁴⁾の下より突き通されて死んだ。(大塚)権大夫の被官の市野宮孫三郎も同じく討死をした。そうしたところ、味方が追々(米野の戦闘場所へ)馳せ着いたので、(大塚)権大夫の印(=首)は敵に取られなかった。それから(敵の飯沼)勘平は池田長吉(の軍勢)へ馳せ向かい(戦って)討死した、とのことである。

b 二番に(一柳直盛の家臣の)服部孫惣は川(木曾川)を越えて、堤へ乗り上げたところ、(敵の)藤田権左衛門という者が出向き、鎧を合わせて味方(=一柳直盛から見ると敵)の(いる堤の)内へおびき入れ、(服部)孫惣が上鎧⁽⁶⁾になり、(敵の藤田)権左衛門に鎧を付けたが、その身も七ヶ所の深手を負い、漸く死を逃れたが、後日、死んだ。

c 三番に(一柳直盛の家臣の)藤野久左衛門が(堤へ)乗り上げたところ、(敵は)爪川と名乗り、馳せ向かって(きて)鎧を合わせ、これも(敵がいる)堤の内へおびき入れ、大勢(の敵)で取り包み、四方より(敵が)突きかかったので、(藤野)久左衛門は数ヶ所の深手を負い、すでに危なかったところ、「我預」(=藤野久左衛門が預かっているという意味か?)の足軽の小頭の小牧長九郎⁽⁷⁾という者が走って来て、刀を持って敵10人をなぎ倒し、大勢の中へ走って入り討死したので、(藤野)久左衛門は堤を乗り越えて引き退いた。

そうしたところ、一柳直盛の人数(軍勢)が(米野の戦闘場所へ)大勢馳せ着いて、味方は勝利を得た。dここに一柳三郎左衛門の被官の平井作右衛門が鎧下⁽⁸⁾にて(敵の)首を取った。これは(一柳)三郎左衛門の一番首であった。e後藤六兵衛が鎧下にて(敵の)首を取った。f渋谷理左衛門が鎧下にて武市善兵衛(岐阜の組頭)を討ち取った。g近藤市内が前田半三郎(紫母衣の士)を討ち取り、羽織などを分捕った。h一柳九郎兵衛、片野七郎右衛門、米山茂左衛門、岩田十左衛門、高橋太兵衛、相野与右衛門、安東助之丞、藤井四郎兵衛、浅野半左衛門、岩崎長右衛門、岡島長左衛門、これらの者共は比類のない働きをして(敵の)首を取った。i森兵右衛門は(敵と)鎧を合わせて手負いをした。j石川忠右衛門、今井新十郎、林九右衛門、この者共も(敵と)鎧を合わせて良い働きをした、とのことである。k馬場三平、市川清六は(敵の)首を取った。

lここに桑原兵右衛門という浪人が一柳直盛の備を借りて、このところへ馳せ向かい(敵の)首を取った。m一柳直盛の本陣へ馳せて来た何某という浪人が(一柳直盛の)御備を借りて、敵を討ち取った。(この何某は)今後、(一柳直盛の)御被官に召し出されくださるようにと、(討

ち取った敵の)首を持って(一柳直盛に御)目見をした。このほか、鎧を合わせて武勇をあらわした士共は多くいたが、(現時点ではかなり以前のことになり)久々のこと(なのでそのほかは)覚えがない。

⑮そうしたところ、津田藤右衛門、同藤三郎父子(一人は猩々皮の羽織を着て、一人は赤母衣をかけていた)が300ばかりの人数(軍勢)をまとめて、殿をして(米野から川手村へ)引き退いたが、⑯一柳直盛があとを追って、追い散らそうと進んだところ、高間新兵衛が(一柳直盛の)馬の口に取り付き、(一柳直盛の)御人数は残らず(敵の軍勢)を討ち散らす働きをしたので、味方はもつてのほか無勢(=軍勢が少ないこと)になった。

⑰特に溝川深田にて「足場が悪い(ことと無勢になったので一柳直盛の軍勢の進撃を止めるべきである)」と(高間新兵衛が)言ったので、(一柳直盛は)怒って「(馬の口に取り付いている高間新兵衛に対して、進撃するために)馬の口を放せ。そうでないならば、(高間新兵衛を)斬って捨てる」と(言っ)て馬上にて長太刀を振り回した、とのことである。

⑱兼松正吉は、今回は一柳直盛の旗下に付き、このところへ来た。兼松正吉が言うには「(高間新兵衛が言うように、足場が悪いので、(一柳直盛の軍勢の進撃を)今少し見合わせなさるべきである。荒田の橋のあたりにて(敵を)追い散らす時(=機会)もあるべきか」と言われた。この兼松正吉は老武者と言い⁽⁹⁾、(武功について)覚えの士である。(兼松正吉が)戦場に行く時は、毎度、刀の鞘に足半履あしなかばきを結び付けて出られた。(この足半履は)昔、信長公から下された、とのことである。子細は『信長記』にある(=書かれている)。

⑲(高間)新兵衛が言うように、深田に馬の足が入ったので、(一柳直盛の進撃は)思うままにならなかった間に、⑳津田父子は所々、案内者(=その場所の地理などに通じた人⁽¹⁰⁾)であり、うまく道筋より引き退いた。

【川手村への追撃(進撃)…8月22日】

㉑しかし、(一柳直盛は)追々に引き取った敵共(を追って)、米野(現・岐阜県羽島郡笠松町米野)より川手(現・岐阜県岐阜市上川手・下川手)まで2里(=約7.9km)余りを追い付き、川手の町まで押し掛けた(=進んで攻撃した⁽¹¹⁾)が、㉒敵(=織田秀信方の軍勢)は火を掛けたので、(一柳直盛の軍勢は)町中を行き来することができず、川手村の東に人数(軍勢)を備えていたところへ、㉓池田輝政が米野に陣取りをしていたので、それより一柳直盛へ使者が来た。その内容は「御先手(=一柳直盛の軍勢)が川手村の敵を追い詰めたことは言うべきこともない。そうであれば、㉔いずれも(=他の諸将)は米野に陣取りをしているので、一柳直盛も米野へ早々に引き取るように」とのことであった。

【米野村への撤退…8月22日】

㉕よって、(一柳直盛は)米野村へ帰った。右のところ(=米野)に池田輝政、有馬豊氏、加藤嘉明、堀尾忠氏が旗を立てて一ヶ所にいた。そのところへ一柳直盛が来たので、その時、加藤嘉明が言うには「一柳直盛の今日の御働きはさてさて見事なる御事(である)」と言われた。このことは兼松正吉が詳しく知っている。

【岐阜城の出城である瑞龍寺山砦を攻撃…8月23日】

同(8月)23日、米野に陣取っている諸大名衆は、福島正則を先手として、(8月23日の)未明に岐阜へ取り掛かった(=うってかかった⁽¹²⁾)。㉖一柳直盛は稲葉山瑞龍寺取出丸(=瑞龍寺山砦)に石田三成方より加勢として、家老の柏原六(マツ)(彦カ)右衛門が立て籠っているところへ取り掛かった(=うってかかった⁽¹³⁾)。

㉗一柳直盛に加わって攻めた衆は、松倉重政、兼松正吉、浅野幸長の兵が少々加わり、(稲葉山瑞龍寺取出丸)即時に乗り落とした。このことは兼松正吉が詳しく知っている。その場にて

働き手に合った(=よく働いた、という意味か?)士共は多くいたが、(現時点ではかなり以前のことになり)久々のこと(なのでそのほかは)覚えがない。

この時、一柳直盛は牀机に腰をかけ、兼松正吉と一緒に山原(=山の中の平地⁽¹⁴⁾)にいた。そうしたところに、⑳岐阜山より石火矢、鉄炮を打ち掛け、そのあたりの山端(=山のはし⁽¹⁵⁾)へあたり、岩が砕けて落ちた。兼松正吉が言うには「(敵が牀机に腰をかけていた一柳直盛を)大将と見て、鉄炮を打ち掛けた、と見えるので、山陰へ少し寄るべきである」と言われた。

㉑その後、織田秀信(岐阜城主)より両使をもって言ってきたのは「城(岐阜城)を明け渡して退去するので、あとを追ってこないように(=追撃してこないように)」とのことであった。この柏丸(=瑞龍寺山砦⁽¹⁶⁾)の城攻めのことは『関ヶ原記』に詳しく記されている。

【岐阜落城後の戦功評価…8月23日】

岐阜落城の後、(味方の)大名衆はいずれも七曲(口)(=岐阜城の大手口にあたる)へ寄り合った。そうしたところ、(池田輝政の家老の)伊木清兵衛が言うには「(池田輝政の軍勢は)水の手へまわり本丸へのぼり攻め入った」と言われた。その時、福島正則が「(福島正則の軍勢が)大手を打ち破り、堀に(取り)付き、(岐阜城主の)織田秀信に(福島正則が)降参を求めたので、この城(岐阜城)は福島正則が取った(=攻め落とした)」と言われた。

その時、山内一豊が言うには「(池田輝政と福島正則のどちらが岐阜城を攻め落としたのか、という論争は)互いに必要のない御問答である。㉒(本日の)岐阜の山(攻め)は福島正則が取った。昨日(=8月22日)の川越え(=木曾川越え)の先陣と今日(8月23日)の柏丸(=瑞龍寺山砦)(攻め)は一柳直盛が取った。よって、また先への武者押し(=武者が隊を組んで進んでゆくこと⁽¹⁷⁾)のこと(=岐阜城まで攻め落とすこと)が済んだ(=完了した)」と言われた。

㉓その時、井伊直直も「一柳直盛の昨(日)と今(日)の御手柄共は言うまでもない」と言われた。同(8月)23日の暁に一柳直盛は美濃木田の渡しに陣取り、同(8月)24日、赤坂に陣取り、2、3日(赤坂に)逗留した。

2. 『一柳家記』の記載に関する考察

8月22日は、木曾川渡河作戦の決行日であるが、その前日(8月21日)の夜(亥の刻[夜10時頃])にすでに一柳直盛は、木曾川の渡河地点である河田の堤へ行き、陣取りをした(下線①)。これは、一柳直盛が木曾川渡河作戦の先陣を切りたい、という意欲のあらわれであったのかもしれない。

翌日(8月22日)の朝、河田の堤の下において、木曾川を渡河する予定の諸将に弁当の饗応があった(下線②)。この時は、単なる弁当の支給ではなく、木曾川渡河の順番(戦闘序列)の決定の協議があった(下線③、⑤)。

当初の渡河案は、山内一豊の提案により、一番目に池田輝政が渡河して、二番目に堀尾忠氏が渡河し、その2人の部将が渡河を完了した地点に備を立てて、そのあとに一柳直盛が渡河する、という案であった(下線③)。

この案は、河田(渡河地点)から木曾川を渡河する池田輝政の組の諸将の中で最も軍勢の人数が多く(表1参照)、組を統率する池田輝政(しかも池田輝政は家康から先陣を命じられていた[下線⑥])が一番目に渡河し、三番目に軍勢の人数が多い堀尾忠氏(表1参照)が二番目に渡河する、という順当な案であった。

三番目に一柳直盛が渡河する、というのは河田に近い地元の大名(尾張国黒田城主)であり(下線④)、地理に詳しくあったからであろう。

この案は、軍勢数の多い池田輝政と堀尾忠氏が一番目と二番目に渡河して、渡河を完了した地

点に備を立てる、ということから、まず橋頭堡（＝渡河・上陸作戦の際、その地点を確保し、後続部隊の作戦の地歩を得るための拠点⁽¹⁸⁾）を確保して、その地点を多くの軍勢で守備して後続の諸将の渡河を容易にする、という意味では、軍事的にも順当な案であった。

しかし、一柳直盛はこの案に反対し（下線⑤）、それに対して池田輝政も譲らなかったため（下線⑥）、山内一豊は第二案を提案した。その第二案は、池田輝政の名代として家老の伊木清兵衛の軍勢を少数で渡河させ、その次に一柳直盛が渡河して、そのあとに池田輝政が渡河する、というものであった（下線⑧）。

この第二案は、家康から先陣を命じられている池田輝政のメンツを立てつつ、一柳直盛の申し出も考慮した妥協案と言えるものであった。この第二案に池田輝政と一柳直盛は同意した（下線⑨）。

そして、一柳直盛の軍勢が渡河して中洲へ到達すると、その他の諸将の軍勢も渡河して中洲の河原まで到達した（下線⑩）。さらにそこで諸将は鉄炮の競り合いを始めた（下線⑩）、としているが、これは、織田秀信方の軍勢に対して、中洲から諸将の軍勢が威嚇発砲をした、という意味であろうか。

池田輝政と山内一豊は、中洲から敵状を視察して、山内一豊は敵の軍勢数（織田秀信方の軍勢数）を4000～5000くらいと推計し、一柳直盛は3500くらいと推計した（下線⑪）。このように、目視して敵の軍勢数の推計が異なっていることは興味深い。

こうした経過から、木曾川を一気に渡河したのではなく、いったん中洲まで渡河してから、中洲で敵状を視察し、それからさらに渡河して木曾川の渡河を完了したことがわかる。

この次の問題として、中洲からどの部将が一番先に渡河を完了して、敵（織田秀信方の軍勢）と一番に戦うのか、という問題があった。その点を示すのが下線⑫、⑬、⑭である。

池田輝政は中洲から渡河して早くも一戦を始めるように見えたので（下線⑫）、それに続いては敵との戦いに一番乗りできなかったため、一柳直盛は少し下流へ移動して（下線⑬）、そこから渡河して敵の軍勢（織田秀信方の軍勢）に突っ込んだ（下線⑭）。このようにして、一柳直盛は織田秀信方の軍勢との戦いに一番乗りができた。

下線⑭によれば、一柳直盛は800ばかりの軍勢を一手に備として編成したこと、中洲からの渡河を完了した時刻（つまり、米野へ到達した時刻）が午の刻（＝真昼の12時頃）であったことがわかる。よって、米野の戦いが開始された時刻は、午の刻（＝真昼の12時頃）過ぎということになる。

上述したように、この日（8月22日）の朝に渡河の順番（戦闘序列）を協議して決めて河田（渡河地点）から渡河を開始したので、一柳直盛が渡河を完了して一番に米野へ到達するのに約6時間かかったことになる（諸将による協議の時間も含む）。

一柳直盛が約800人の軍勢を一手に備として編成したことは、備を構成する人数の単位として参考になる。

米野の戦いにおける戦闘と首取りについては、下線a～mに記されているが、首帳における記載との関係を検討するため、下線a～mの検討は後述する。

米野の戦い^{しんがり}後の経過としては、織田秀信方の津田藤右衛門、同藤三郎父子が300くらいの軍勢をまとめて、殿をして、米野から川手村へ撤退した（下線⑮）。

織田秀信方の軍勢数については、後述するように「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状」⁽¹⁹⁾によれば、2000ばかりというのが実数に近いと思われるので、米野の戦いのあとは300くらいになったということは、織田秀信方の軍勢数は約6分の1～約7分の1に減少したことになる。

一柳直盛は撤退した織田秀信方の津田藤右衛門、同藤三郎父子を追撃したが（下線⑬）、深田に馬の足が入ったため進撃が思うようにならなくなった（下線⑭）。このため、兼松正吉や家臣の高間新兵衛が進撃を思いとどまるように一柳直盛に対して述べた（下線⑮、⑯）。

そして、津田藤右衛門、同藤三郎父子は地元の事情に通じていたため（足場が悪い深田を避けて）うまく撤退した（下線⑰）。

そのため、一柳直盛は追撃を開始して米野から川手まで2里余りを追いついて川手の町を攻撃したが（下線⑱）、敵（織田秀信方の軍勢）は川手の町に火を掛けたので、一柳直盛は川手の町中を往来できずに⁽²⁰⁾、川手村の（郊外の）東に布陣した（下線⑲）。

下線⑲からは、町が攻撃されるのを食い止めるために町に火を掛けるという方法があったことがわかり、その結果、町への進撃を食い止める効果があったことがわかる。

そして、川手村の（郊外の）東に布陣していた一柳直盛に対して、米野に陣取りをしていた池田輝政から使者が来て、家康方の諸将が陣取りをしている米野へ撤退するように指示された（下線⑳、㉑）。

そのため、一柳直盛は米野へ撤退した（下線㉒）。そこには、池田輝政、有馬豊氏、加藤嘉明、堀尾忠氏が旗を立てて一ヶ所にいた（下線㉒）、としているが、加藤嘉明は池田輝政の組ではなく、福島正則の組であるので（表1、表2参照）、8月22日は池田輝政の組の諸将とは別行動であったはずなので米野の戦いに参戦していないはずであり、その点、この記載（下線㉒）には疑義がある。

下線㉒では、池田輝政、有馬豊氏、加藤嘉明、堀尾忠氏が旗を立てて一ヶ所にいた、としているので、在陣する場合、旗は必須アイテムであったことがわかる。

8月23日は岐阜城攻めの日であるが、一柳直盛は岐阜城の出城である瑞龍寺山砦（石田三成の家老・柏原彦右衛門が守備していた）を攻撃した（下線㉓）。この攻撃では一柳直盛のほかに松倉重政、兼松正吉、浅野幸長の兵が少々加わり、即時に攻め落とした（下線㉔）。

岐阜山より石火矢、鉄炮を打ち掛け、そのあたりの山端（＝山のはし）へあたり、岩が砕けて落ちた（下線㉕）、という記載があるが、岐阜城がある金華山から瑞龍寺山へは直線距離で約2.2kmなので、岐阜山が金華山を指すとすると、石火矢、鉄炮の射程距離からして届かないと考えられる。よって、この石火矢、鉄炮はもっと近距離から撃たれたと思われる。

その後、織田秀信（岐阜城主）が降伏した（下線㉖）。岐阜落城後の戦功評価では、一柳直盛は8月22日の木曾川渡河の先陣と、8月23日の瑞龍寺山砦攻撃の戦功が認定された（下線㉗、㉘）。

2. 米野の戦いの首帳

『一柳家記』には、米野の戦いの首帳が記載されているだけでなく、米野の戦いにおける、各人の戦闘状況（戦闘シーン）の記載がある。そのため、本文の下線a～mの記載と、首帳の記載内容をまとめた表3の【首帳1】（以下、首帳1）をもとに検討したい。

一柳家家臣で一番目に突入した大塚権大夫は、敵の飯沼勘平（＝飯沼長資）と鎧を合わせて戦い討死した（下線a）。この戦闘の際に、大塚権大夫は堤の上から鎧を突き下した（下線a）、としていることから戦闘の場所は、木曾川の堤の上であったことがわかる。つまり、木曾川の渡河を完了して、真っ先に大塚権大夫が木曾川の堤を駆け上がって、堤の下に布陣していた織田秀信方の軍勢との戦闘になったことがわかる⁽²¹⁾。二番目に突入した服部孫惣、三番目に突入した藤野久左衛門も堤を駆け上がって敵と鎧を合わせて戦っている（下線b、c）。

首帳1によれば、大塚権大夫は討死して、その被官・市野宮孫三郎も同場にて討死している。

被官も同じ場所で討死したということは、被官も一緒に戦闘していたことになる。このことから当時の戦闘形態を知ることができる。同様のケースとして、三番目に突入した藤野久左衛門の場合、足軽小頭（首帳1では組子⁽²²⁾）の小牧長九郎が藤野久左衛門を助けるために突入して討死した（そのため藤野久左衛門は堤を乗り越えて無事撤退できた）。

下線 b、c の記載をもとに考えると、米野の戦いでは、織田秀信方の軍勢は米野（つまり木曾川の堤の下）で多くの人数で一柳家家臣の攻撃を待ち構えていたことがわかる。そして、堤を駆けあがってきた一柳家家臣を堤の下へ誘い込んで、多くの人数で取り囲んで突いたことがわかる。

つまり、米野の戦いの緒戦では、一番目、二番目、三番目に敵陣（＝織田秀信方の軍勢）へ突っ込んだ一柳家の家臣は、本人が討死して被官も討死した（一番目に突入した大塚権大夫）、本人が深手を負い後日死亡した（二番目に突入した服部孫惣）、本人が深手を負い足軽小頭（首帳1では組子）が討死した（三番目に突入した藤野久左衛門）、というケースになる。

このような結果になったのは、木曾川の渡河のあと、米野の堤を駆け上がり、堤の下に密集する敵陣（＝織田秀信方の軍勢）へおびき入れられたため、敵に包囲されて四方より突きかかられたので、この一柳家の家臣で一番目、二番目、三番目に敵陣（＝織田秀信方の軍勢）へ突っ込んだ時点では、一柳家の軍勢は追いついていなかったため援護もできなかったからであると考えられる。

そして、一柳家の軍勢が米野の戦闘場所へ大勢追いついて、はじめて一番首を取った（下線 d）。その後は首取りの記載が続いている（下線 e、h、k、l、m）。

米野の戦いでは、「鎧を合わせる」、「鎧を付ける」、「上鎧」、「鎧下」などの記載から戦闘の主力武器は敵味方とも相互に鎧であったことがわかる。刀の記載があるのは1箇所だけである（下線 c）。

浪人が陣借りをして（一柳直盛の陣を借りて）参陣し、首取りをしたケースが2例ある（下線 l、m）このケースから当時の戦闘形態を知ることができる。この2例のうち1例（下線 l の桑原兵右衛門）は首帳1に名前の記載があるので、陣借りのケースでも首帳に名前が載せられたことがわかる。この陣借りの目的は、一柳直盛の被官になることであった（下線 m）。

首帳1の記載の特徴をまとめると以下のようなになる。

- (1) 首帳1に名前がある者はすべて本文中に名前の記載がある。
- (2) 首帳1には、敵の首を取ってもその個数の記載がないケース、首取りをせずに討死したケース、敵と鎧を合わせたが首取りの記載がないケース、敵と鎧を合わせたが手負いをして首取りの記載がないケース、戦った敵の名前が記されているが首取りの記載がないケース、もそれぞれ記されている。つまり、首帳1は、首取りをした首の個数だけが記されているわけではない。
- (3) 本文の下線 h では首を取った、という記載はあるが、具体的な戦闘シーンに関する記載はない。そのためであるのか、首帳1では首の個数（各1）しか記載がない。
- (4) 首帳1において、戦った相手の名前が記されているのは3例のみである。
- (5) 首帳1では、首を取らずに討死したケース（大塚権大夫、大塚権大夫の被官・市野宮孫三郎、藤野久左衛門の組子・小牧長九郎）も記載されている。この場合、首取りはしていないものの、一番目と三番目に突入したケースなので（下線 a、c）、その戦功が認められた、ということであろう。ちにみに、二番目に突入した服部孫惣（深手を負い後日死亡）も首取りはしていないが、首帳1に名前が記載されている。これも同様の理由と考えられる。
- (6) 本文における下線 j の3人は（敵と）鎧を合わせた、という記載はあるが、（敵の）首を

- 取った、という記載はない。よって、首帳1でも、下線jの3人は（敵と）鎧を合わせた、という記載のみであり、首の個数の記載はない。このことから、首帳1には敵の首を取っていないでも名前が記載されたことがわかる。
- (7) 本文の記載には、何某という浪人が一柳直盛の備を借りて敵を討ち取り、その首を持って（一柳直盛に御）目見をした（下線m）、としているが、首帳1には、その何某という浪人の記載はない。ただし、同様に陣借りをして首取りをした桑原兵右衛門は、首帳1に名前の記載がある。よって、一柳家の家臣ではない浪人であっても、陣借りをして首取りをした場合は、首帳に記載されたことがわかる。
- (8) 本文の記載では、一柳三郎左衛門の被官の平井作右衛門が敵の首を取った、としている（下線d）。そして、それが一柳三郎左衛門の一番首であった、としている（下線d）。しかし、首帳1には平井作右衛門の名前は記載されておらず、一柳三郎左衛門の名前しか記載されていない。そして、首の個数も記されていない。このことは被官の首取りはその主人の首取りと見なされた、ということを示している。
- (9) 首帳1では、馬場三平と市川清六は2人で首取りをしたケース（首の個数は記載されていない）として記載されている。
- (10) 首帳1を見ると、各人が首取りをした首の個数はそれぞれ1であり、1人で複数の首取りをしたケースはない（つまり、1人で首を2つ以上取った者はいない）。
- (11) 首帳1において、戦った敵の名前がわかるのは3例（藤田権左衛門、武市善兵衛、前田半三郎）ある。本文の記載では、この3例以外に、2例（爪川〔下線c〕、飯沼勘平〔下線a〕）がある。下線cによれば、敵は爪川と名乗って馳せ向かってきて鎧を合わせた、としているので、戦った敵の名前がわかる事例は、戦う際に敵が名乗ったことによるものと考えられる。このことから当時の戦闘形態を知ることができる。ただし、戦闘でいつも敵が名乗ったのかどうかは検討が必要である。
- (12) 本文の下線⑦にある「物慣れた者共」の4人は、首帳1に名前の記載がある。

3. 瑞龍寺山砦攻めの首帳

『一柳家記』における瑞龍寺山砦攻めの記載では、米野の戦いの記載のように、具体的な戦闘シーンに関する記載はないが、首帳（表3の【首帳2】。以下、首帳2）は収載されている。

首帳2において、米野の戦いに関する本文の記載に名前がある者（首帳1にも名前がある者）は4名である。よって、この4名は8月22日（米野の戦い）と同月23日（瑞龍寺山砦攻め）の両日、首取りをしたことになる。

首帳2を見ると、各人が首取りをした首の個数はそれぞれ1であり、1人で複数の首取りをしたケースはない（つまり、1人で首を2つ以上取った者はいない）。この点は首帳1と同様である。

西善兵衛は、瑞龍寺山砦攻めで首取りをしたが、浅野幸長の家臣に首を奪われた（首帳2における記載）。このように、当時の戦闘では、自分が取った首を他の大名の家臣に奪われるケースがあったことがわかる。

『一柳家記』の記載では、瑞龍寺山砦攻めには、一柳直盛のほかに松倉重政、兼松正吉、浅野幸長の兵が少々加わった、としている（下線㉗）。「8月28日付浅野長政宛徳川家康書状」⁽²³⁾に「(8月)23日、岐阜城を乗取り（中略）浅野幸長が瑞龍寺の「つぶら」⁽²⁴⁾に（敵が）城を構えたところへ、即時に乗り崩して、一人も漏らさず討ち捕らえたことは手柄である」（「翌日廿三日、岐阜城を乗取（中略）今度、左京大夫殿すいりやう寺之つぶら二城を構候所、即時乗崩、一

人も不洩被討捕候、御手柄共候」と記され、「9月4日付浅野幸長宛徳川秀忠書状⁽²⁵⁾に「岐阜城を即時に乗り取り、加勢として石田三成の人数が瑞龍寺山に籠ったところ（を攻めて）柏原（彦右衛門）を始めことごとく討ち果たしたことは御手柄である」（「岐阜城即時乗取、并為加勢石田治部少輔人数すいりやう寺山ニ籠置候処、柏原を始悉被討果候由、御手柄之段）」と記されている。また、「8月29日付浅野幸長宛徳川家康書状⁽²⁶⁾には「岐阜城を早速落城させ、そのうえ石田三成が「人衆」を籠め置いた（ところの）物主等まで討ち捕らえた、とのことで、その手柄は言うまでもない」（「岐阜早速落城、其上治部少輔人衆籠置候物主等迄被討捕由候、手柄共可申様無之候）」と記されているが、これらの記載は瑞龍寺山砦攻めを指している、と考えられる。

なお、『一柳家記』には大坂夏の陣（5月6日…道明寺の戦い、八尾・若江の戦い、5月7日…天王寺、岡山での最終決戦）における首帳（表3の【首帳3】。以下、首長3）が収載されているが、『一柳家記』の本文には大坂夏の陣に関する記載は全くない。

首帳3を見ると、各人が首取りをした首の個数はそれぞれ1であり、1人で複数の首取りをしたケースはない（つまり、1人で首を2つ以上取った者はいない）。この点は首帳1、首帳2と同様である。首帳3では、首取りをせずに討死したケース（金井市左衛門、片野十大夫、大岩忠左衛門）も記載されている。この点は首帳1と同様である。

おわりに

「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状⁽²⁷⁾は、8月22日の戦況報告である。その書状には、（1）河田の渡しの（木曾川渡河後の戦況として）、敵（織田秀信方の軍勢）が2000ばかりにて川端（＝米野を指すと考えられる）へ出陣してきたので、（池田輝政の組の諸将が）川を越えて（＝渡河して）合戦に及んだ、（2）池田輝政の手元へ（敵の）首500程を討ち取ったという飛脚が（井伊直政のところへ）来た、（3）（織田秀信方の）百々綱家⁽²⁸⁾と犬間勘平は討死した、（4）織田秀信はかろうじて山（＝岐阜城）へ逃げ上がった、（5）（味方で）手負い（の者は）多くなかった、（6）しかし、一柳直盛は「案内之事」であるので、先を致したため（＝地元の事情に詳しいので先導役として先陣を務めた、という意味か？）、その家中は随分の者（＝大身の家臣）が討死した、ということが記されている。

上記（1）では、織田秀信方の軍勢を2000ばかり、としていて、上述した山内一豊の推計4000～5000ばかり、一柳直盛の推計3500ばかり（下線①）とは食い違っているが、井伊直政書状に記された2000ばかりというのが実際の数に近いと思われる。

とすると、上記（2）では、敵の首500程を討ち取った、としているので、織田秀信方の軍勢の約4分の1は討ち取られたことになる。

上記（3）で、討死した、としている「犬間勘平」は、「飯沼勘平」（下線a）を指す、と考えられる。

上記（6）で、一柳家家臣では大身の者が討死した、としているが、これは大塚権大夫などの討死した家臣を指すのであろう。

8月22日の注進状に対する徳川家康からの書状は8月26日付で出されたが、池田輝政宛の家康書状が一通（「8月26日付池田輝政宛徳川家康書状⁽²⁹⁾）、同日付の堀尾忠氏・池田長吉・一柳直盛・山内一豊・有馬豊氏・松下重綱・浅野幸長宛徳川家康書状が一通（「8月26日付堀尾忠氏・池田長吉・一柳直盛・山内一豊・有馬豊氏・松下重綱・浅野幸長宛徳川家康書状⁽³⁰⁾）というように分かれている（この2通の文面はほぼ同じである⁽³¹⁾）。これは池田輝政の組（「三左衛門尉殿之組」⁽³²⁾の組頭である池田輝政と、その組の他の諸将を、書札礼の関係で分けたのであろう。

「8月29日付堀秀治宛徳川家康書状」⁽³³⁾、「8月29日付堀親良宛徳川家康書状」⁽³⁴⁾には「(8月)22日、濃州幸田(=河田)と萩原の二手(=池田輝政の組と福島正則の組)に(分かれて木曾川を渡河して)行ったが、岐阜の「人衆」(=織田秀信方の軍勢)が新加納(現・岐阜県各務原市那加新加納町など)を守備していたところに、池田輝政が松原瀬を越えて一戦に及び(敵を)追い崩して、町際まで残らず(敵を)討ち捕らえた、としている。よって、池田輝政が戦ったエリアは米野ではなく新加納だったことがわかる。

つまり、『一柳家記』に記載されているように一柳直盛が戦ったエリアは米野であり、前掲「8月29日付堀秀治宛徳川家康書状」、前掲「8月29日付堀親良宛徳川家康書状」に記載されているように池田輝政が戦ったエリアは新加納であるので、この戦いの名称は、米野の戦いではなく、米野・新加納の戦いと改称した方がよいのかもしれない⁽³⁵⁾。

「8月29日付堀尾忠氏宛徳川家康書状」⁽³⁶⁾には、この度の濃州表での合戦の時に堀尾忠氏の家中で討ち捕らえた「首注文」を家康が披見した、としている。このことから、この場合、首帳の作成目的が家康に披見してもらうためであったことがわかる。よって、一柳家の首帳も同様の目的で作成された可能性が考えられる。

『一柳家記』に記載された3つの首帳(表3の首帳1～3)のうち、米野の戦いについての首帳(表3の首帳1)は、本文における戦闘シーンの記載と比較検討することができる、という点で史料学的意義がある。米野の戦いでの戦闘シーンの記載を見ると、主力武器は鎧であり、鎧が多用されている(刀の使用の記載は1箇所のみ)点は注目される。

『邦訳日葡辞書』⁽³⁷⁾には「ヤリシタ(槍下) 槍の下。また、戦闘の真最中」であり、例として「(槍下で首を取るは手柄であ[引用者注:訳者は「dea はdaの誤りではなくて、‘である’の省略形、と指摘している]) 激しい戦いの最中に敵の首を斬るのはすぐれた勇敢な行為である」という例文が出ている。このことから、当時の戦いでは鎧を使用して激しい戦闘がおこなわれ、その結果、敵の首を取ることが通例化していた、と考えられる。

樋口隆晴氏の指摘によれば、鎧は、武士が持つ「持鎧」と足軽・雑兵が持つ、「数鎧」(そのうち柄の極端に長い物が「長柄(鎧)」と称される)と総称されるものに大きく分類される⁽³⁸⁾。よって、米野の戦いで使用された鎧は持鎧であった、と考えられる。

『一柳家記』の本文中における「備」の表記にも注意したい。樋口隆晴氏の指摘によれば、「備」とは「戦国大名軍隊の編成の基本単位」であり、「備」あるいは「一手」と呼ばれる部隊が戦闘の基本単位であった⁽³⁹⁾。さらに、樋口氏は「兵種別の編成は「備を立てる」という言葉があるように、戦いにおいてその都度組み合わせる臨機のもの」であり「大名のみがその関係を解消する権限を持つ、恒常的な存在である寄子寄親の関係は編「制」、合戦毎に組み合わせられる臨機な存在である備は編「成」という言葉を使用したほうが適切だろう」⁽⁴⁰⁾と指摘している。

『一柳家記』の本文中では、上述のように「両備を立てて」(下線③)、「備を張り出して」(下線⑦)、「一手に備(として編成し)」(下線⑭)、「備を借りて」(下線l、m)という表記がある。

米野の戦いでは、一柳直盛は「800ばかりの人数(軍勢)を一手に備(として編成し)」(下線⑭)で敵(織田秀信方の軍勢)に最初に攻め込んだ、としている。一柳直盛は3万5000石なので(表2参照)、1万石につき300人の軍役人数を基準に推計すると、軍役人数は1050人になる。この人数は、上述した「800ばかりの人数(軍勢)」=「一手」=「備」(下線⑭)と比較すると、250人不足しているが、この程度の人数差は実際の戦いではあり得たのかもしれない。

[註]

- (1) 『一柳家記』(近藤瓶城編『改定史籍集覧』第十四冊、近藤活版所発行、1902年。臨川書店、復刻版発行、1984年、71～88頁)。『一柳家記』(塙保己一編纂『続群書類従』第二十輯下、続群書類従完成会、1923年、471～489頁)もほぼ同文である。本稿では、前掲『一柳家記』(近藤瓶城編『改定史籍集覧』第十四冊)の記載内容をもとに考察した。
- (2) 小和田哲男監修・小和田泰経著『関ヶ原合戦公式本』(学研パブリッシング、2014年、74～79頁)。小和田哲男監修『[図解] 関ヶ原合戦までの90日－勝敗はすでに決まっていた!』(PHP研究所、2013年、80～83頁)。
- (3) 前掲『一柳家記』(塙保己一編纂『続群書類従』第二十輯下、480頁)では「十四歳」としている。
- (4) 『日本国語大辞典(第二版)』7巻(小学館、2001年、1435頁、「瀬踏(せぶみ)」の項)。
- (5) 「スヤリ(素鎧)」とは「まっすぐな刃の付いた普通の槍」という意味である(土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年、593頁)。
- (6) 「上槍(うわやり)」とは「敵と槍を交えた時、相手の槍の柄を自分の槍の柄で下に押えつけ、圧倒すること」という意味である(『日本国語大辞典(第二版)』2巻、小学館、2001年、530頁)。
- (7) 首帳1の記載では小牧長九郎について「組子」としている。「組子(くみこ)」とは「徒(かち)組、弓組、鉄砲組などの組頭の支配下にある者。組下。組足。組衆。組付。」という意味である(『日本国語大辞典(第二版)』4巻、小学館、2001年、1004頁)。
- (8) 後掲註(37)を参照。
- (9) 兼松正吉は、天文11年(1542)生まれなので、慶長5年(1600)の時点では59歳である。
- (10) 『日本国語大辞典(第二版)』1巻(小学館、2000年、741頁、「案内者(あんないしゃ)」の項)。
- (11) 「押し掛ける」とは「進んで攻撃する。押しよせる。」という意味である(新村出編『広辞苑(第七版)』、岩波書店、2018年、410頁)。
- (12) 「取り掛かる」とは「うってかかる」という意味である(前掲『広辞苑(第七版)』、2129頁)。
- (13) 前掲註(12)参照。
- (14) 『日本国語大辞典(第二版)』13巻(小学館、2002年、235頁、「山原(やまはら)」の項)。
- (15) 前掲『日本国語大辞典(第二版)』13巻(235頁、「山端(やまはな)」の項)。
- (16) 「柏丸」とは、上述した石田三成の家老の柏原六^(マツ)(彦カ)右衛門が立て籠っているところ(つまり、瑞龍寺山砦)という意味であろう。
- (17) 『日本国語大辞典(第二版)』12巻(小学館、2001年、959頁、「武者押(むしゃおし)」の項)。
- (18) 前掲『広辞苑(第七版)』(769頁、「橋頭堡(きょうとうほ)」の項)。
- (19) 「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状」(中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、1959年、623～625頁)。
- (20) 当時の戦いにおける、戦法としての放火の実態について今後検討する必要がある。この場合は川手の町に放火することによって、敵(織田秀信方の軍勢)は一柳直盛の追撃を食い

止めることができた点に注目したい。

- (21) そのため、首帳1には「米野提^(ママ)（堤カ）」と記載されているのであろう。
- (22) 「組子」の意味については、前掲註（7）を参照。
- (23) 「8月28日付浅野長政宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、641頁）。
- (24) 「円（つぶら）」とは「まるくてふっくらとしているさま。小さくてまるいさま。」（『日本国語大辞典（第二版）』9巻、小学館、2001年、412頁）という意味なので、「つぶら」=丸（=曲輪）という意味である可能性も考えられる。
- (25) 「9月4日付浅野幸長宛徳川秀忠書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、647頁）。
- (26) 「8月29日付浅野幸長宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、646頁）。
- (27) 「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、623～625頁）。
- (28) 百々綱家が討死した、というのは誤報である。
- (29) 「8月26日付池田輝政宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、631頁）。
- (30) 「8月26日付堀尾忠氏・池田長吉・一柳直盛・山内一豊・有馬豊氏・松下重綱・浅野幸長宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、632頁）。
- (31) 前掲「8月26日付池田輝政宛徳川家康書状」、前掲「8月26日付堀尾忠氏・池田長吉・一柳直盛・山内一豊・有馬豊氏・松下重綱・浅野幸長宛徳川家康書状」では「一戦に及び、数千人を討ち捕らえた」としているが、上述したように、前掲「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状」では、敵（織田秀信方の軍勢）は2000ばかり、池田輝政の手元へ（敵の）首500程を討ち取った、としているので、「数千人を討ち捕らえた」という記載には人数的に誇張があると考えられる。
- (32) 「8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、624頁）。
- (33) 「8月29日付堀秀治宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、650～651頁）。
- (34) 「8月29日付堀親良宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、651～652頁）。
- (35) 「8月28日付浅野幸長宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、639頁）では「（木曾）川を越えて合戦に及んだ」としているので、これが米野の戦いを指すと考えられるが、戦場の地名に関する記載はない。
- (36) 「8月29日付堀尾忠氏宛徳川家康書状」（前掲『徳川家康文書の研究』中巻、653頁）。
- (37) 前掲『邦訳日葡辞書』（812頁）。
- (38) 樋口隆晴（構成と文）・渡辺信吾（絵と解説）『図解・武器と甲冑』（ワン・パブリッシング、2020年、88～89頁）。本書の刊行時には、著者の樋口隆晴氏から本書を御恵送いただいた。記して感謝する次第である。
- (39) 前掲『図解・武器と甲冑』（92頁）。
- (40) 前掲『図解・武器と甲冑』（94頁）。

表1
 「(慶長5年) 8月21日付福島正則覚書」(注1)

(「岡文書」)(注2)

部将名	a (人)	b (人)	a - b (人)	所領 がある 国	居城	石 高
A 福島正則	6,500	6,000	500	尾張	清須	20万石
B 池田輝政	6,500	4,560	1,940	三河	吉田	15万2000石
A 細川忠興	2,000	5,100	-3,100	丹後	宮津	17万石
A 加藤嘉明	1,600	3,000	-1,400	伊予	松前	10万石
A 藤堂高虎	1組 1,500	2,100	-600	伊予	板島	7万石
A 黒田長政	1組 1,300	5,460	-4,160	豊前	中津	18万2000石
B 浅野幸長	5,000	6,750	-1,750	甲斐	府中	22万5000石
B 堀尾忠氏	4,000	3,600	400	遠江	浜松	12万石
B 山内一豊	2,600	2,040	560	遠江	掛川	6万8000石
A 京極高知	1,500	4,500	-3,000	信濃	飯田	15万石
B 有馬豊氏	2,200	900	1,300	遠江	横須賀	3万石
B 松下重綱	1,000	480	520	遠江	久野	1万6000石
A 筒井定次	1組 1,000	6,000	-5,000	伊賀	上野	20万石
A 田中吉政	4,000	3,000	1,000	三河	岡崎	10万石
C 西尾光教	400	600	-200	美濃	曾根	2万石
合 計	41,100	54,090				
Aの合計	19,400					
Bの合計	21,300					
Cの合計	400					

※表1において、A、B、Cの区分、b、a - b、所領がある国、居城、石高、合計、Aの合計、Bの合計、Cの合計は作表にあたり補足した。

【凡例】

A…福島正則の組 (A、Bの区分の根拠については表2参照)。

B…池田輝政の組 (A、Bの区分の根拠については表2参照)。

C…福島正則の組、池田輝政の組のいずれの組に属したかは不明。

a…「(慶長5年) 8月21日付福島正則覚書」における人数 (兵力数) 表記。

b…1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した各部将の人数 (兵力数)。

(注1) 8月21日は木曾川渡河作戦の前日にあたる。

(注2) 『藤堂高虎関係資料集・補遺』〈三重県史資料叢書5〉(三重県編集・発行、2011年、97～98頁)。

表2
木曾川渡河作戦（8月22日）と岐阜城攻城戦（8月23日）における家康方諸將の編成

部将名	所領		石高	備考
▼池田輝政の組（注1）				
池田輝政	三河	吉田	15万2000石	
浅野幸長	甲斐	府中	22万5000石	
山内一豊	遠江	掛川	6万8000石	
松下重綱	遠江	久野	1万6000石	
池田長吉	近江国内		2万2000石	
有馬豊氏	遠江	横須賀	3万石	
堀尾忠氏	遠江	浜松	12万石	
一柳直盛	尾張	黒田	3万5000石	道筋について案内をする（注2）
合 計 66万8000石				
▼福島正則の組（注3）				
福島正則	尾張	清須	20万石	
加藤嘉明	伊予	松前	10万石	
細川忠興	丹後	宮津	17万石	
黒田長政	豊前	中津	18万2000石	
藤堂高虎	伊予	板島	7万石	
田中吉政	三河	岡崎	10万石	
本多俊政	大和	高取	2万5000石	
生駒一正	讃岐	丸亀	6万1000石	
京極高知	信濃	飯田	15万石	
筒井定次	伊賀	上野	20万石	
松倉重政	伊賀	名張	8000石	
秋山 ^(マツ) 左近（右近カ=光匡カ）（注4）	不明		不明	
神保相茂	大和国内		6000石	
合 計 127万2000石				
▼その他				
桑山元晴（注5）	大和国内		1万石	福島正則の組に属した可能性も考えられる
西尾光教（注6）	美濃	曾根	2万石	池田輝政の組と福島正則の組のいずれの組に属したかは不明
徳永寿昌（注7）	美濃	高松	3万石	池田輝政の組と福島正則の組のいずれの組に属したかは不明

※表2における所領・石高・備考は、作表にあたり補足した（ただし、備考の（注2）は除く）。

（注1）史料典拠は、「（慶長5年）8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状写」（中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、1958年、623～625頁。

『愛知県史』資料編13、織豊3、愛知県史編さん委員会編集、愛知県発行、2011年、971号文書）における記載による。

（注2）前掲（注1）に同じ。

- (注3) 前掲(注1)と同じ。
- (注4) 前掲「(慶長5年)8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状写」には、「秋山左近」と記されているが、「(慶長5年)8月27日付徳川家康書状」(前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、636～637頁)の宛所である諸将9人の中の1人に「秋山右近大夫」の名前があり、前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻(636頁)では、この「秋山右近大夫」を秋山光匡に比定している。よって、前掲「(慶長5年)8月22日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政書状写」における「秋山左近」は、「秋山右近」を「秋山左近」と誤記した可能性が高いと考えられる。
- (注5) 史料典拠は、岐阜城攻城戦の報告を受けた旨を記した「(慶長5年)8月25日付藤堂高虎・本多俊政・生駒一正・桑山元晴宛徳川家康書状」(前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、628頁。前掲『愛知県史』資料編13、織豊3、989号文書)の宛所に桑山元晴の名前があることによる。同じ宛所になっている藤堂高虎・本多俊政・生駒一正は福島正則の組に属するので、桑山元晴は福島正則の組に属した可能性も考えられる。
- (注6) 史料典拠は、岐阜城攻城戦の報告を受けた旨を記した「(慶長5年)8月25日付田中吉政・一柳直盛・西尾光教・徳永寿昌・池田長吉宛徳川家康書状写」(前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、629頁。前掲『愛知県史』資料編13、織豊3、988号文書)の宛所に西尾光教の名前があることによる。池田輝政の組と福島正則の組のいずれの組に属したかは不明である。
- (注7) 史料典拠は、岐阜城攻城戦の報告を受けた旨を記した「(慶長5年)8月25日付田中吉政・一柳直盛・西尾光教・徳永寿昌・池田長吉宛徳川家康書状写」(前掲・中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、629頁。前掲『愛知県史』資料編13、織豊3、988号文書)の宛所に徳永寿昌の名前があることによる。池田輝政の組と福島正則の組のいずれの組に属したかは不明である。

表3

【首帳1】

石田三成の謀反の時に（おいて）、慶長5年8月22日、尾張河田の川越え（の後）米野提 ^(マツ) （堤カ）（の戦い）における士卒の首帳		
一柳三郎左衛門	鑓下にて首 ^(マツ) （首カ）を取る（注1）	本文の下線 d
一柳九郎兵衛	1	本文の下線 h
大塚権大夫	討死。同被官・市野宮孫三郎も同場にて討死。（注2）	本文の下線 a
石川忠右衛門	鑓を合わせる	本文の下線 j
後藤六兵衛	鑓下にて首を取る	本文の下線 e
藤野久左衛門	鑓を合わせて手を負う。組子・小牧長九郎が討死。（注3）	本文の下線 c
片野七郎右衛門	1	本文の下線 h
米山茂左衛門	1	本文の下線 h
岩田十左衛門	1	本文の下線 h
森兵右衛門	鑓を合わせて手負	本文の下線 i
脇 ^(マツ) （服カ）部孫惣（注4）	相突にして相手は藤田権左衛門（注5）	本文の下線 b
今井新十郎	鑓を合わせる	本文の下線 j
林九左 ^(マツ) （右カ）衛門（注6）	鑓を合わせる	本文の下線 j
渋谷理左衛門	鑓下の首。相手は武市善兵衛。	本文の下線 f
高橋太兵衛	1	本文の下線 h
相野与右衛門	1	本文の下線 h
安東助之丞	1	本文の下線 h
藤井四郎兵衛	1	本文の下線 h
桑原兵右衛門（注7）	1	本文の下線 l
浅野半左衛門	1	本文の下線 h
岩崎長右衛門	1	本文の下線 h
岡島長左衛門	1	本文の下線 h
近藤市内	相手は前田半三郎。紫母衣 ^{はろ} の武者である。	本文の下線 g
馬場三平	この両人が首を取る（注8）	本文の下線 k
市川清六		
合計	12（注9）	

※首帳1に名前がある者はすべて本文中に名前の記載がある。

※首帳1には、敵の首を取ってもその個数の記載がないケース、首取りをせずに討死したケース、敵と鑓を合わせたが首取りの記載がないケース、敵と鑓を合わせたが手負いをして首取りの記載がないケース、戦った敵の名前が記されているが首取りの記載がないケース、もそれぞれ記されている。つまり、首帳1は、首取りをした首の個数だけが記されているわけではない。

※本文の下線hでは首を取った、という記載はあるが、具体的な戦闘シーンに関する記載はない。そのためであるのか、首帳1では、本文の下線hに該当する各人のところは、首の個数（各1）しか記載がない。

※首帳1において、戦った相手の名前が記されているのは3例のみである。

※首帳1では、首を取らずに討死したケース（大塚権大夫、大塚権大夫の被官・市野宮孫三郎、藤野久左衛門の組子・小牧長九郎）も記載されている。

※本文における下線 j の 3 人は（敵と）鎧を合わせた、という記載はあるが、（敵の）首を取った、という記載はない。よって、首帳 1 でも下線 j の 3 人は（敵と）鎧を合わせた、という記載のみであり、首の個数の記載はない。このことから、首帳 1 には（敵の）首を取っていなくても名前が記載されたことがわかる。

※本文の記載には、何某という浪人が（一柳直盛の）御備を借りて、敵を討ち取り、その首を持って（一柳直盛に御）目見をした、としているが、首帳 1 には、その何某という浪人の記載はない。

（注 1）本文の記載では、一柳三郎左衛門の被官の平井作右衛門が敵の首を取った、としている（下線 d）。そして、それが一柳三郎左衛門の一番首であった、としている（下線 d）。しかし、首帳 1 には平井作右衛門の名前は記載されておらず、一柳三郎左衛門の名前しか記載されていない。また、首の個数も記されていない。このことは被官の首取りはその主人の首取りと見なされた、ということを示している。

（注 2）被官も同じ場所で討死したということは、被官も一緒に戦闘していたことになる。

（注 3）本文には、藤野久左衛門が鎧を合わせた敵は爪川と名乗った（下線 c）、と記されている。

（注 4）本文では「服部孫惣」と記されている。

（注 5）「相突（あいづき）」とは「鎧術で、双方が同時に相手を突くこと」である（『日本国語大辞典（第二版）』1 巻、小学館、2000 年、48 頁）。

（注 6）本文では「林九右衛門」と記されている。

（注 7）本文の記載によれば、桑原兵右衛門は浪人であり、一柳直盛の備を借りて敵の首を取った、としている。

（注 8）2 人で首取りをしたケース（首の個数は記載されていない）であったことがわかる。

（注 9）首数の合計は首帳 1 の作表にあたり補足した。敵の首を取っても、その首の個数の記載がないケースは合計にカウントしていない。

【首帳 2】

同（8 月）23 日、岐阜（城）瑞龍寺山取出の丸において（戦った時の）士卒の首帳	
一柳三郎左衛門★	1
長谷川角右衛門■	1
後藤六兵衛★	1
松宮新左衛門■	1
喜多尾作左衛門■	1
相野与右衛門★	1
栗田長兵衛■	1
林九左 ^(マツ) （右カ）衛門（注 1）★	1
西善兵衛■	城内へ馳せ入って首を取ったところ、浅野幸長の士とまみえて、その首を奪われたので、奪われないようにと競り合いになったが、一柳直盛が言うには「その方の働きは（自分が）見たので（浅野幸長の士が）欲しがるのであれば、（その首を）取らせよ」と言ったので、遣わした、とのことである。
合 計	8（注 2）

■…本文中には名前が記載がない者。首帳 1 に名前がない者。

★…本文中（米野の戦い）に名前が記載がある者。首帳 1 にも名前がある者。

※首帳 1 にも名前がある者（表 2 における★）は 4 人いるが、林九左^(マツ)（右カ）衛門以外の 3 人は、

首帳1では首取りをしていることがわかるので、この3人は8月22日と同月23日の両日、首取りをしたことになる。

(注1) 本文では「林九右衛門」と記されている。

(注2) 首数の合計は首帳2の作表にあたり補足した。浅野幸長の家臣に首を奪われた西善兵衛の首取りについては合計にカウントしていない。

【首帳3】

大坂夏の陣（5月）6日・7日（の戦いにおける）士卒の首帳（注1）	
森兵右衛門★▼	1
一柳四郎右衛門■	1
一柳右京■	1
多羅尾九兵衛■	1
村山茂左衛門■	1
藤井金右衛門■	1
岩田半介■	1
長谷川角右衛門■	1
高橋清兵衛■	1
寺西佐左衛門■	1
喜多川与次右衛門▼	1
安東源大夫■	1
中村才兵衛■	1
高間新兵衛▼	1
喜多尾弥五左衛門■	1
佐藤武左衛門■	1
金井市左衛門■	討死
片野十大夫■	同（討死）
大岩忠左衛門■	同（討死）
合計	16（注2）

★…首帳1にも名前がある者。

▼…本文中に名前の記載がある者（ただし、大坂の陣関係の記載ではない）。

■…本文中には名前の記載がない者。

※首帳3を見ると、各人が首取りをした首の個数はそれぞれ1であり、1人で複数の首取りをしたケースはない（つまり、1人で首を2つ以上取った者はいない）。この点は首帳1、首帳2と同様である。

※首帳3では、首を取らずに討死したケース（金井市左衛門、片野十大夫、大岩忠左衛門）も記載されている。この点は首帳1と同様である。

(注1) 5月6日は道明寺の戦い、八尾・若江の戦い、5月7日は天王寺、岡山での最終決戦があった。

(注2) 首数の合計は首帳3の作表にあたり補足した。

